

異言語間伝達における結束性の移行

著者	西原 鈴子
雑誌名	研究報告集
巻	9
ページ	85-109
発行年	1988-03
シリーズ	国立国語研究所報告 ; 94
URL	http://doi.org/10.15084/00001113

異言語間伝達における結束性の移行

西原 鈴子

要旨：談話のまとまり，自然な流れを形成する言語的手段である結束性とは具体的にどのようなものであるか，異言語間のコミュニケーションにおいてそれがどのように移行するかを検討した。結束性の表出手段として提案されている五点の中から，(1)指示，(2)省略，(3)語彙，の三点を選び，日本語と英語の相互翻訳例を資料としてそれぞれの表出方法の差異を知ると共に，伝達の問題点を指摘した。

キーワード：談話の結束性，指示，省略，語彙の範疇，異言語間伝達

Abstract: Cohesion is the semantic notion through which a group of sentences is interpreted as a unified whole, rather than just a collection of unrelated sentences. Attempts have been made here to identify the linguistic means of creating cohesive function. Three out of the five possible elements proposed by Halliday & Hasan (1976), viz., (1) reference, (2) ellipsis and (3) lexical cohesion were chosen for examination. The inter-lingual comparison of such elements between English and Japanese texts were made, and it was found that the way cohesive function is manifested differs between the two languages, creating a possible communication gap between them.

Key Word: textual cohesion, reference, ellipsis, lexical cohesion, inter-lingual communication

1. 談話の結束性

書き言葉、話し言葉のいかんを問わず、ことばの内容が自然に抵抗なく理解されるためには、種々の言語的・非言語的手段の働きがあると考えられる。ことばの流れが、支離滅裂なものではなく一定のまとまりを持ったものであると理解されるためには、言語的には、(1)全体として同一のあるいは関連した事柄について述べられていること、(2)文脈の前後関係が筋道の通ったものであること、かつ(3)理解に必要な背景的知識を持ち合わせていること、などが条件となる。(1)、(2)、(3)のような結果をもたらす言語的手段を総合して、Halliday & Hasan (1976)¹⁾は結束性 (cohesion) と呼んでいる。

結束性の存在は、言語の論理的命題 (=文) 間に潜在する意味関係を、解釈する側が理解するための必要条件である。具体的には、文の連鎖において、ある要素の意味解釈が他の要素に依存してのみ可能である場合に、その二要素間に結束関係を認めることができる。たとえば、

- (1) 岩下庄志さんがマンションの管理人になって八年たつ。
- (2) 東京の乃木坂の工事現場でガードマンをしていて、住宅管理会社にスカウトされた。
- (3) 熱心に交通整理をする姿が目止まったのだという。

(朝日 1987.4.21)

のような流れにおいて、下線 (a)、(b)、(c) が岩下さんについての描写であり、(d) が住宅管理会社の人事権を持つ人間の「目」を意味するということは、日本語を母語とする者なら誰でも容易に理解するであろう。その直感的な意味解釈において、下線部分が誰について言及しているかは、発話的には省略されているが、前提 (presupposition) として伝達されている。(2) の文において、ガードマンをしていたのが岩下さんであるという前提は、省略という言語的手段を媒介とする推論の結果として獲得されたものである。

また、(2)の文が(1)の続きであると理解されるのは、(2)において下線部分の主語が省略されていることに由来する。(3)はさらに(2)を引き継いで、ガードマン→交通整理、スカウト→目に止まる、という語彙的相関関係によって意味の理解が可能になっている。それは同義語が使われているというような事ではなく、日本語ではそれらの語彙が自然な相関関係にあるという文化的要因によっている。(1)から(3)にいたる流れにおける意味のまとまりは、省略および語彙的相関が伝達を助ける約束事として機能しているために獲得されるのである。省略された要素が誤りなく伝達され理解されるためには、いわゆる「ゼロ照応」、すなわち、省略された要素を復元できるような前提が運用規則に存在することが考えられる²⁾。

Halliday & Hasan (1976) は、言語の意味体系の三大要因として概念機能 (ideational function)、対人機能 (interpersonal function)、および談話機能 (textual function) を挙げ、談話機能の一つとして、文構造に依存しない意味関係を支配する機能である結束性を位置付けている。彼らによれば、結束関係は、指示 (reference)、代入 (substitution)、省略 (ellipsis)、接続 (conjunction) などの文法的手段、および語彙的手段によって表出される。上記の (1)~(3) は省略および語彙的結束性の例である。その他、指示、代入、接続は、それぞれ (4)~(6) のような場合を指す。

(4) 私が自分に祖父のあることを知ったのはわたしの母が産後の病気で死に、その後二月経って、不意に祖父が私のまえに現れて来た、その時であった。(暗夜行路)

(5) 八重子もとみ子も、いちおう遠慮したが、やがてメニューをかかえて相談しはじめた。……二人の女は顔を見あわせた。

(点と線)

(6) 旅馴れたと言っても女の足だから、十町や二十町後れたって一走り追いつけると思いながら炉の傍でいらいらしていた。しかし踊子たちが傍にいとなくなると…… (伊豆の踊子)

また、結束性は意味のまとまりであるから、音声的な単位、あるいは段落といった外見的なまとまりとは区分を異にする。上記(3)の次の文は、段落を新たにして「派遣されたのが、東京・品川にそのころできた御殿山パークマンションだった。」と続く。派遣されたのが岩下さんであったことは前の段落から継続した前提となっている。

言語環境を共有する集団内においては、上記のような手段を運用するルールについての暗黙の理解が存在し、その言語に固有の知識として共有されていると考えられる。実際のコミュニケーションの場面においては、その知識は伝達者・被伝達者間の前提事項となる。Grice (1975)の「協調の原則」³⁾がその運用をよく説明している。

単文の範囲を越えた談話構造における規則性は、一般的に文構造のそれと比べて変数が多様であり、いつ適用されるかの予測が付きがたい。Halliday & Hasan の提案する結束性の表出手段も、言語の運用において常時義務的な部分なのでは決していない。しかし、ある発話内容がまとまったものであるという直感が、理解という結果を生み出す時、そこに働くさまざまな現象を記述することはその言語における伝達の特色を発見する一つの方法であると言えるだろう。

結束性は言語によって内容・表出方法共に異なっていると考えられる。たとえば、上記(5)の例にある「代入」は、同じ表現を繰り返すことを好ましくないスタイルであるとする英語の修辞習慣から、英語では頻発するが、そのような傾向を持たない日本語では、比較的頻度が少ない。反対に、(2)の例におけるような主語の省略は日本語では非常に多いが、英語では、重文などの特殊な場合を除いて通常は考えられない。そのような異言語間での談話の結束性の比較対照は、翻訳あるいは外国語の学習過程における誤解や誤用を予測・予防し、対象言語における運用の「自然さ」を習得することによって伝達の効率を高める結果を生むと考えられる。本論では、日本語と英語の運用における結束性を、日・英語間の翻訳の過程でおこる現象を通じて主として日本語側から比較対照することとする。

2. 結束性の異言語間伝達

異言語間伝達において最も困難な問題は、一つの言語の持つ情報を完璧に誤解の余地なく他の言語に移し換える事であろう。翻訳という作業を例にとってみても、語、文、談話の各レベルで様々な障壁がある。同義であると思われる語の意味素性が一致しないことによるズレ、構文通りの逐語訳が他言語では意味をなさないための誤訳、風俗習慣の違いから来るイメージの曲解など、翻訳にまつわる悲劇は限りない。一見問題なく翻訳されているように見えても微妙なところで情報の漏れが発見されることもある。

前述のように、結束性は言語内の談話における情報の流れの中に見出される「まとまり」の概念であり、伝達者にとっての自然な思考の流れ、被伝達者にとっての意味解釈の自然な成り行き、と密接な関わりがある。他言語への伝達の過程においては、目標となる言語の運用の規則によって元のままでは翻訳することができないこともある。次の翻訳例においては、下線の部分に日本語・英語間の相違が見られる。

- (7) 邦男はいったんあけかけた目を閉じ、顔をしかめながら、手で後頭部を押さえた。ずきずき痛む。昨夜、飲みすぎたせいだなと彼は思った。胸がむかつき、二日酔いの気分にあちがいない。だれと飲んだかを思い出そうとしたが、それはだめだった。

(ノックの音が)

- (8) Having opened his eyes, Kunio then closed them, pressing his hand on the back of his head as he screwed up his face. His head throbbed with pain. I drank too much last night, he thought. He felt nauseous. No question, he had a hangover. He tried to recall just who he had been drinking with, but it was no use. (THERE WAS A KNOCK)

日本語においては、あけかけて閉じたのが誰の目で、誰の手で誰の後頭部を押しえたか、誰の頭がずきずきしたか、誰の胸がむかついたか、誰の二日酔いか、誰が思い出そうとしたかなどのことは、この文脈ではまさに自明のことであり、前提事項として当然省略されるべきであって、繰り返して用いられるとくどいと感じられるであろう。しかし英語では構造上、名詞が指示語なしに用いられることや、主語目的語を除去することは不可能であるから、日本語におけるこの種の結束性は翻訳の過程で割愛せざるを得なくなってしまう。一方、英語においては、Kunio=he/his, eyes=them という指示語と名詞との照応によって結束性が保たれているのであって、翻訳文内ではそれらの要素は必須のものとなっている。原文と翻訳文を対照させて見ると、自然さを保持するための文のまとめかたの差、すなわち、異言語間伝達における結束性の移行がみられるのである。以下においては、Halliday & Hasan (1976) の提案する結束性の表出手段のうち、指示、省略、語彙的結束性の三項目について日・英語の比較対照を試みる。

3. 指示

指示は名詞を代名詞に、あるいは、代名詞+名詞に言い換えることによって、前後関係のまとまりが生じる結束性の一表出方法である。前方照応 (anaphora) の場合—上記(4)の「その後」、「その時」—および後方照応 (cataphora) の場合—下記(16)の「この話」—があり得る。日本語と英語とでは何を指示語化するかに差が見られる。下にその例を示す。

- (9) 私が自分に祖父のある事を知ったのは私の母が産後の病気で死に、その後二月経って、不意に祖父が私の前に現れて来た、その時であった。私の六歳の時であった。

或る夕方、私は一人、門の前で遊んでいると、見知らぬ老人が

某処へ来て立った。眼の落ち窪んだ、猫背の何となく見すぼらしい老人だった。私は何という事なくそれに反感を持った。

老人は笑顔を作って何か私に話しかけようとした。然し私は一種の悪意から、それをはぐらかして下を向いて了った。釣上がった口元、それを囲んだ深いしわ、変に下品な印象を受けた。「早く行け」私は腹でそう思いながら、尚意固地に下を向いていた。

然し老人は中々その場を立ち去ろうとはしなかった。私は妙に居たたまらない気持になって来た。私は不意に立上がつて門内へ駆け込んだ。その時、

「オイオイお前は謙作かネ」と老人が背後から云った。

私はその言葉で突きのめされたように感じた。そして立止った。振返った私は心では用心していたが首はいつか音なく點頭いて了った。

「お父さんは在宅かネ？」と老人がきいた。

私は首を振った。然しこのうわ手な物言いが変に私を圧迫した。

老人は近寄って来て、私の頭へ手をやり、

「大きくなった」と云った。(暗夜行路)

- (10) It was about two months after my mother died in child-birth that I first laid eyes on my grandfather. I was six years old at that time.

It was evening, and I was sitting idly outside our front gate. A strange old man came and stood over me. He stooped a little, his eyes were sunken, and there was about him a general air of seediness. I took an instant dislike to him.

Smiling unnaturally he made as if to talk to me. In spite I refused to meet his eyes, and stared at the ground. The

turned up mouth, the deeply creased skin around it … everything about him was common. “Go away”, I wanted to tell him. I refused to look up. But the old man continued to stand in front of me, until I could not bear his presence any longer. I got up and ran through the gate. The old man called out from behind, “Hey, are you Kensaku?”

I felt as though the words had struck me a blow. I stopped and turned around. I was as wary as before, but from habit perhaps, my head nodded obediently.

“Is your dad home?” he asked. I shook my head. The familiarity of his tone filled me with foreboding.

He walked up to me and put his hand on my head. “You have grown.” (A DARK NIGHT’S PASSING)

原文に十一箇所ある指示語のうち、翻訳文でも指示語として現れるのは四箇所のみである。そのうち、定冠詞によって旧情報化されている二箇所を除くと、はっきり指示語から指示語へ翻訳されているのは、「それを囲んだ深いしわ」が「the deeply creased skin around it」となっている箇所、および、変則的ではあるが、「……その時であった。私が六歳の時であった。」が“I was six years old at that time.”となっている箇所のみということになる。その他は無視されているか、他の表現に言い換えられている。無視されているものは、翻訳すると英語での自然さをそこなうという理由によると思われる。「その後二月经って」のその後は母の死後、「その時であった」のその時は祖父が現れた時、「腹でそう思いながら」のそうは「早く行け」ということ、直後にある「その時」は門内へ駆け込んだ時、であるが、それらの例における指示語はすべて文脈に既出の部分の繰り返し、あるいは承前の要約である。英語における、繰り返しを避ける修辞習慣からこのような日本語の用法は翻訳不可能なのであろうと思われる。

言い換えられているのは次のような箇所である。

(11) 見知らぬ老人がそこへ来て立った。

A strange old man came and stood over me.

(12) 私は何という事なくそれに反感を持った。

I took an instant dislike to him.

(13) それをはぐらかして下を向いてしまった。

I refused to meet his eyes, and stared at the ground.

(14) 然し老人はなかなかその場を立去ろうとしなかった。

But the old man continued to stand in front of me.

以上の四例のいずれにおいても、日本語文の指示語が照応するのは、単なる名詞ではなくもう少し意味的な広がりを持った表現である。(11)の「そこ」は、単に「門の前」というよりも「門の前で遊んでいる主人公のいる場所」と理解されるべきであろう。同様に、(12)では「それ」＝「みすぼらしい老人の様子」、(13)の「それ」＝「老人が笑顔を作って話しかけようとしたこと」、(14)の「その場」＝「下を向いている主人公のそば」であって、指示語がそれぞれ文脈と広く照応していることが分かる⁴⁾。一方英語訳においては指示語はすべて狭い照応を示しており、日本語の原文の照応関係を正確に翻訳しているとは言えない。

英語から日本語への翻訳の場合はどうであろうか。英語にも一つ以上の名詞あるいは文脈と照応する指示語の用法はみられる。それらを日本語に訳した場合の例を示す。

(15) If you really want to know about it, the first thing you'll

probably want to know is where I was born, and what my lousy childhood was like, and how parents were occupied and all before they had me, and all that David Copperfield kind of crap, but I don't feel like going into it. In the first place, that stuff bores me, and in the second place, my parents would have about two haemorrhages apiece if I told anything pretty personal about them. They're quite touchy about anything like that, especially my father. They're nice and all — I am not saying that — but they're also touchy as hell. (THE CATCHER IN THE RYE)

- (16) もしも君がほんとうにこの話をききたいんならだな、まず僕がどこで生まれたかとか、僕が生まれる前に両親は何をやっていたかとか、そういった《デーヴィッド・カパーフィールド》式のくだらないことから聞きたがるかもしれないけどさ、実をいうと僕は、そんなことはしゃべりたくないんだな。第一、そういったことは、僕には退屈だし、第二に、僕の両親てのは、自分たちの身の話を話そうものなら、めいめいが二回ぐらいつ脳溢血を起こしかねない人間なんだ。そんなことでは、すぐ頭に来るほうなんだな、特におやじのほうさが。いい人間ではあるんだぜ。だから、そういうことをいってんじゃないんだ。けど、すぐ頭に来るほうなんだな。

(ライ麦畑でつかまえて)

(15)・(16)を見ると英語において下線を引かれた広い文脈的照応を持つ指示語はすべて翻訳されていることが分かる。

一方、前述の(7)から(8)への翻訳においては日本語の原文にはなかった指示語である代名詞が英訳文中に多発している。英語において構文的に不可

欠の要素である主語、目的語、特定化された指示対象を持つ名詞が代名詞化して翻訳文に挿入されているのである。

日本語において自然である指示語の (a) 文脈既出部分の繰り返し、要約を次への橋渡しとして行く用法、(b) 広い文脈的照応を持つ用法、の二つは結束性の要因としてそのまま英語において通用するとは限らないことが分かる。(a) はくどい表現として、(b) は大学を退学させられた「落ちこぼれ」学生のごくくだけた語り口の文体であることから、英語においてはいずれも積極的に奨励される用法ではないと思われる。一方(7)から(8)への翻訳においては、すべての主語を代名詞化するような用法は日本語ではくどい表現として避けられているが、英語では構文上の必要性から省略できないのだと思われる。これは、以下に述べる日本語の省略用法と深い関係がある。

4. 省略

談話においては原則的に文脈から復元可能な意味的部分は発話せず、話し手・聞き手間の共通理解を前提として省略することができる。日・英語におけるそのような省略に関する種々の談話的制約については久野(1978)に詳しく紹介されている。特に同著において「話者の視点」の固定と省略可能性とが不可分の関係にあるという提案がなされているのは(同著 p. 103以下)卓見である。さらに「異主語省略」について視点の固定の問題を厳しく検討していることは注目にあたする⁵⁾。しかし、同著の提案する原則が日・英両語にあてはまるという主張は必ずしもそうではないように思われる。少なくとも日本語においては、同著で例示されているよりも長い文脈では、視点が固定されていない場合でも主語の省略が起り得る。また複数の主語が同時に省略される例も不自然には思われなことがあ

(17) 井谷というのは、神戸のオリエンタルホテルの近くの、幸子たち

が行きつけの美容院の女主人なのであるが、縁談の世話をするのが好きと聞いていたので、幸子がかねてから雪子のことを頼み込んで、写真を渡しておいたところ先日セットに行った時に、「ちよっと奥さん、お茶に付きあって下さいませんか」と手の空いた隙に幸子を誘い出して、ホテルのロビーで始めてこの話をしたのである。（細雪）

- (18) Mrs. Itani (“Itani” everyone called her) had a beauty shop near the Oriental Hotel in Kobe, and Sachiko and her sisters were among the steady customers. Knowing that Itani was fond of arranging marriages, Sachiko had once spoken to her of Yukiko’s problem, and had left a photograph to be shown to likely prospects. Recently, when Sachiko went for a wave-set, Itani took advantage of a few spare minutes to invite her out for a cup of tea. In the lobby of the Oriental Hotel, Sachiko first heard Itani’s story. (THE MAKIOKA SISTERS)

(17)において下線部分は井谷、幸子のいずれかを主語としており、それがどちらであるかは自明のこととされている。英語訳では分詞構文が使われている “Knowing that Itani was fond of arranging marriages,“ 中の Knowing の主語が同構文の通例に従って省略されているほかはすべての述語に主語が補ってある。日本語においては文脈の流れの中で一つ以上の主語が同時に省略されても理解の際に復元可能であるが、英語においてはそれは不可能である。日・英語のその点における差は「視点」の制約の差であるように思われる。前述の久野の原則はその点で追加修正されなければならないであろう。

英語訳が幸子寄りの視点から書かれていることは、幸子の行動に言及する

際に分詞構文がつかわれていること、また最後の文が原文と離れて「幸子が井谷の話聞いた」と書き換えられていることから分かる。日本語では、井谷（「女主人なのであるが」まで）～幸子（「セットに行った時に」まで）～井谷（最後まで）と視点が入れ替わっている。これによって、連続する文の主語が省略できるのは両文の視点が固定化されているからだとする上記久野の提案（前掲書p. 107, 110）は、英語にはあてはまるが日本語の制約としては存在しない、あるいは非常に緩い制約となっている、ということが分かる。英語からの翻訳においても日本語では自由に視点を変え、省略を行っていることが次の例によっても示されている。

- (19) Secondly, there's a perception in the United States, rightly or wrongly, that the Japanese market, is being closed to, as one person said, a greater degree than perhaps Japanese people think and more open than American people think. But in any case, that the Japanese do not have exacty the same conditions for the importation of goods into Japan than we have in the United States, it's quite true that if Japan were to open up every aspect of its trade to imports and remove all non-tariff barriers, the probability would be that the balance would not dramatically shift, but you would remove the excuse that many Americans have they are being unfairly discriminated against in the trade relationship. And this is a perception that's growing in the United States, that Japan does not permit the same condition of fairness in trade with us as we do with Japan.

（米議員 9 人に問う）

- (20) 第二に、正しいかまちがっているかわかりませんが、ある人の言

い方だと日本市場は日本人が考えている以上に閉鎖されているが、アメリカ人が考えているよりも開放されているといった認識がアメリカ国内にあります。しかし、いずれにせよ、日本人が物資の輸入に当たってアメリカと全く同じ条件にあるわけではありませ
ん。もし、日本が輸入を全面的に開放、非関税障壁をすべて撤廃
したとしても、恐らく不均衡が劇的に縮小することはないでし
ょう。でも貿易関係では不公平な差別を受けているといったアメリ
カ人の口実を取り除くことにはなるでしょう。アメリカ国内で強
まっている見方は、日本はアメリカが日本に対して認めているの
と同じ公平な貿易条件を認めていないということです。

(米議員 8人に問う)

原文では「物資の輸入に当たって私達と同じ条件にない」こと、「アメリカ人の口実をあなたがたが取り除く」ことと、終始アメリカ寄りの視点が貫かれているが、(20)の翻訳文では、下線の部分は視点が中立的に変えられている。そのため「貿易関係では……」に始まる箇所において、動詞「取り除く」の主語は、日本語文からは「日本が輸入を全面的に開放、非関税障壁をすべて撤廃することが」という部分であり、それが省略されているように解釈されてしまう。結果として、日本に対して同情的、あるいは少なくとも批判的でない、米議員の姿が浮かび上がってくる。しかし原文は上述のように「あなたがた」に対する間接的な要求であった。翻訳を媒介にして微妙な理解の差が生じていることは否めない。この種の翻訳作業が日本語の結束性を主たる目標にしてもよいのかという翻訳者のモラルの問題になるが、ここではその判断は避けることとする。

5. 語彙的結束性

語彙的手段によって意味的まとまりを形成することは頻繁になされること

である。Halliday & Hasan (1976, p. 288) では、次のような具体的な使用方法が説明されている。

語彙的結束性の種類

1. 語の反復
 - (a) 同じ語の繰り返し
 - (b) 同義語, 類義語の使用
 - (c) 使用下位語から上位語への使用
 - (d) 語彙の範疇
2. 連語

次の例においては、同じ語の繰り返し、同・類義語の使用、連語などによって意味的な関連付けがなされている。

- (21) 私はその時五つか六つくらいではなかったかと思う。その話を聞いて縁側へ出ると, 私は声を上げて泣き出した。その場所が何処であったか記憶していない。ただろ覚えに覚えていることは、祖母だったか母だったか, とにかく家人が急に泣き出したことをいぶかって、縁側へ飛び出して来て, 何か二言三言言葉をかけてくれたことである。私には勿論物語そのものは理解できなかったが、母を背負って、その母を山へ棄てに行くという事柄の悲しみだけが抽象化されて、岩の間から滴り落ちる水滴のように、それが私の心に滲みいって来たのである。私は自分が、母と別れなければならぬという悲しみに耐えかねて泣き叫んだのである。

(娯捨)

「泣き出した～泣き出した～泣き叫んだ」「私」「母」「縁側」の繰り返し、「五つか六つ」「二言三言」などの連語、および「祖母～母」から「家人」

への下位・上位関係などが(21)の内容のまとまりに貢献しているわけで、Halliday & Hasan(1976)の提案は説得力を持っている。その他、同著では扱われていないが、「水滴～滴り落ちる～滲みいる」のような比喩表現も語彙のまとまりに関連している。

語彙的結束性の異言語間伝達においては、考慮すべき事項が多い。その一つは、上記のような語彙間の関連が言語によって異なるであろうという問題である。(22)の翻訳の中では「二言三言」は連語ではなくなっている。このように、翻訳の過程で結束性の効果が失われ、あるいは変えられて行くことがある。

(22) Wasn't I about five or six at that time? On hearing that story I went out onto a porch and screamed and sobbed. I have no recollection of where that place was exactly, but what I do recall in my faint memory is that my grandmother — or was it my mother? — anyhow, a member of my family immediately came flying out to the porch and said something to me — just a few words. Of course, I could not comprehend the story itself, but the sadness of the whole idea of carrying my mother on my back and taking her up a mountain and abandoning her there became an abstraction which oozed into me like waterdrops dripping between rocks. I shrieked and cried, unable to endure the sorrow of being separated from my mother. (OBASUTE)

もう一つの、より深刻な問題は、語彙の範疇に関する概念の差であろう。文化的背景を異にする二言語間では語彙間の関連が異なった範疇に分類されることもあり得る。また、関連の有無について異なった印象を与える可能性も十分考えられる。以下に二組の翻訳例を挙げてそれを示す。

(23) しかし当人はどう思っているにしても、姉妹の順で行かなければならないことだし、妙子の方はもう極まっているようなものだとすると、なおさら雪子の縁談を急ぐ必要があった。が、ざっと以上のような事例が彼女の婚期を後らせた原因になった外に、もう一つ雪子を不仕合せにしたのは、彼女が未年の生まれであることであつた。一般に丙午をこそ嫌うけれども未年の生まれを嫌う迷信は、関東あたりにはないことなので、東京の人達は奇異に感じるであろうが、関西では、未年の女は運が悪い、縁遠いなどと云い、殊に町人の女房には忌んだ方がよいとされているらしく、「未年の女は門に立つな」という諺まであつて、町人の多い大阪では昔から嫌う風があるので、ほんに雪子ちゃんの縁遠いのもそのせいかもしれないなどと、本家の姉は云い云いした。(細雪)

(24) It was none the less out of the question to have the younger sister marry first, and since a match for Taeko was as good as arranged, it became more urgent than ever to find a husband for Yukiko. In addition to the complications we have already described, however, yet another fact operated to Yukiko's disadvantage: she had been born in a bad year. In Tokyo the year of the Horse is sometimes unlucky for women. In Osaka, on the other hand, it is the year of the Ram that keeps a girl from finding a husband. Especially in the old Osaka merchant class, men fear taking a bride born in the year of the Ram. "Do not let the woman of the year of the Ram stand in your door," says the Osaka proverb. The superstition is a deep-rooted one in Osaka, so strongly colored by the merchant and his beliefs, and Tsuruko liked to say that the year of the Ram

was really responsible for poor Yukiko's failure to find a husband. (THE MAKIOKA SISTERS)

(23)には語彙に関して三つの範疇がある。一つは、「縁談」「姉妹の順」「婚期の後れ」「縁遠い」「本家」を含むいわゆる縁組に関する範疇、第二は、「関東」「東京」「関西」などの地域差にかんする範疇、そして第三に「生まれた年」「未年」「丙午」「迷信」「忌む」などを含む陰陽道に関する迷信の範疇である。それぞれに関しての背景的知识なくしては全体を把握することは困難であろう。英語においてもそれらの範疇が自然なものでない限り、(24)の英訳だけでは不十分なのである。

(25) 「さあ、たいていどれか列車が邪魔して見えないと思いますが、念のために調べてみます。少しお待ちください」

助役はそう言って運行表を机にひろげた。無数の線が錯綜している紙の上を助役は指でたどっていたが、

「あっ、ありますよ。わずかな時間ですが、十三番線にも列車がなくて、十五番線にはいっている《あさかぜ》が見える時がありますね。なるほど、こんな時もあるんだなあ」

と、助役は、めずらしいものを発見したように言った。「ありますか？ ジャ、見通しは可能ですね」

三原は、どこか落胆を感じたが、つぎの助役の言葉でまた耳が緊張した。

「可能です。ですが、たった四分間ですよ。」

「四分間？」

三原は目をむいた。心が急に騒いだ。

「それをもう少しくわしく教えてください」

「つまりですね」

と、助役は説明しだした。

「《あさかぜ》が十五番線のホームにはいつてくるのは、十七時四十九分で、発車は十八時三十分です。四十一分ホームに停車しているわけです。この間の、十三、四番線の列車の出入りをみますと、十三番線の横須賀行き一七〇三電車が十七時四十六分に到着し、十七時五十七分に発車します。それが出たあと、すぐに一八〇一電車が十八時一分に同じホーム到着し、十八時十二分に発車します。しかし、その電車が出て、十四番線には静岡行普通の三四一列車が十八時五分にはいつて、十八時三十五分まで停車していますから、となりの十五番線の《あさかぜ》の姿をかくして見えないわけです。」（点と線）

- (26) “Well, I believe there is always one train or another obstructing the view, but let me check, to make sure. Please wait a moment.” He went to his desk and brought out the train charts. His fingers followed the intricate lines that criss-crossed the paper. Suddenly, he remarked, “There is a break! For a short period there are no train on tracks 13 and 14 and you should be able to see the Asakaze at platform 15. Well I never! That is most unusual!” He sounded as if he had discovered something extraordinary.

“There is a break? Then it is possible to see the train?” Mihara was disappointed, but he suddenly became tense when he heard the station master’s next words: “It is possible, but only for four minutes.”

“Only for four minutes?” Mihara’s eyes widened. His heart missed a beat. “Please explain that.”

“To be precise,” the official began, “the Asakaze pulls

in on track 15 at 5:49 and leaves at 6:30. It remains at platform 15 for forty-one minutes. Let's see the arrivals and departures of trains on tracks 13 and 14. On track 13, on the Yokosuka Line, train No. 1703 arrives at 5:46, leaves at 5:57. Then, at 6:01, No. 1801 arrives and leaves again at 6:12. After that Yokosuka Line train has departed the regular No. 341 bound for Shizuoka, arrives at platform 14 and remains till 6:35, blocking the view of the Asakaze on track 15." (POINTS AND LINES)

(25)は、推理小説の一部である。「四分間」だけ、十五番線の電車が十三番線から見えるということを犯人がアリバイ工作に使い、それを三原という刑事が見破るという筋書なのであるが、上に引用した助役の説明は、日本では電車は常に時間通りに到着・発車すること、分きざみの運行表が一般の人々にもたやすく入手できること、交通機関の利用については一般の人々も分単位で行動すること、などの予備知識がなければ意味をなさないことになる。

以上の例からも明らかなように、語彙の結束性を異言語に伝達するためには、語彙の範疇に関する文化的背景の差を克服しなければならない。文化の問題はすなわち個々の言語社会の成員の認知体系の問題である。単独の言語についてそれを論じている Halliday & Hasan (1976) においてはその問題は存在しない。認知体系を異にし、したがって文化的背景の異なる二言語間の伝達において、語彙の単なる翻訳は、その前後に使用される他の語彙群との相関関係、その範疇の自然さ、それによってかもしだされる内容のまとまり、などの伝達については無力である。辞書の限界もまたそこにあると言えるだろう。

6. 終わりに

本論は、談話における結束性がどのような様式を持っているか、それは具体的にはどのような手段によって表出されるか、異言語間の伝達の際に結束性はどのように移行するか、などの問題について考察した。指示、省略、語彙的結束性の項目それ自体は、日・英語共に結束性の表出手段として機能しているが、その表出方法には明らかに差が見られる。異言語間の伝達が翻訳という手段を通して頻繁に行われる今日、それは相互理解の避け難い障壁となっている。同一言語内で内容の自然な流れ、まとまりがどのようにして得られているかという言語運用の研究、およびそれがどのような方法によって最も効果的に他言語に移行出来るかという異言語間コミュニケーションの研究は、今後共続けられなければならない。

注

- 1) プラーク学派の機能主義的言語学の流れを汲み談話 (Text) を対象とする研究の有力な著作。
- 2) 田中(1981), pp. 26-27. 寺津 (1983) では「推論による照応」という用語が使われている。実際には発話されない要素が照応関係を持つ場合、その意味関係は推論によって復元されるというもの。
- 3) 会話が話し手と聞き手との協力的な行為であるという考えに基づいて提案された原則。さらに会話の含意によって説明される。それは量、質、関係、方法の四つのカテゴリーから成り、量に関しては (1) 必要なかぎりの情報を提供すること、(2) 必要とされる以上の情報を提供しないこと、質では (1) うそをつかないこと、(2) 妥当な明証を欠くようなことを言わないこと、関係では、適切であること、方法では (1) はっきり表現すること、(2) あいまいさを避けること、(3) 簡潔であること、(4) 順序立てて話すこと、とされている。そのような原則のもとに談話が構成されて行くものとされている。そこからの逸脱はコミュニケーションの障害となるわけである。
- 4) 寺津(1983)の「推論による照応」の一種。
- 5) 「異主語省略」の条件は次のように定義されている。「Y ハ……………X……………。X ハ……………」の「X ハ」は、話者の視点が完全にYのそれと合致し、第二文も、Yの目から見たXの記述である場合に限り省略できる。

参 考 文 献

- 1) Blum-Kulka, Shoshana (1986) "Shifts of Cohesion and Coherence in Translation", House & Blum-Kulka (eds.) *Interlingual and Intercultural Communication*. Tübingen: Gunter Narr Verlag, pp. 17-35.
- 2) Bolkestein, Grout & Mackenzie (eds.) (1985) *Syntax and Pragmatics in Functional Grammar*. Dordrecht-Holland: Foris Publications.
- 3) Börsch, Sabine (1986) "Introspective Methods in Research on Interlingual and Intercultural Communication", House & Blum-Kulka (eds.) *Interlingual and Intercultural Communication*. Tübingen: Gunter Narr Verlag, pp. 195-209.
- 4) Caton, Charles E (1981) "Stalnaker on Pragmatic Presupposition", Cole (ed) *Radical Pragmatics*. New York/London: Academic Press, pp. 83-100.
- 5) Green, Georgia & Morgan Jerry (1981) "Pragmatics, Grammar, and Discourse", Cole(ed) *Radical Pragmatics*. New York/London: Academic Press, pp. 167-181.
- 6) Grice, Paul (1975) "Logic and Conversation", Cole & Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3 Speech Acts*. New York/London: Academic Press, pp. 41-58.
- 7) Halliday, M. A. K. & Hasan Ruqaiya (1976) *Cohesion in English*. Longman.
- 8) Hinds, John (1982) *Ellipsis in Japanese*. Alberta, Canada: Linguistic Research Inc.
- 9) _____ (1985) "Misinterpretations and Common Knowledge in Japanese", *Journal of Pragmatics* 9, pp. 7-19.
- 10) Levenston, E. A. & Sonnenschein, G. (1986) "The Translation of Point-of-view in Fictional Narrative", House & Blum-Kulka (eds.) *Interlingual and Intercultural Communication*. Tübingen: Gunter Narr Verlag, pp.49-59.
- 11) Lorscheer, Wolfgang (1986) "Linguistic Aspects of Translation Processes: Towards an Analysis of Translation Performance", House & Blum-Kulka (eds.) *Interlingual and Intercultural Communication*. Tübingen: Gunter Narr Verlag, pp. 277-292.
- 12) Newman, Jean E. (1985) "Processing Spoken Discourse: Effects of Position and Emphasis on Judgements of Textual Coherence", *Discourse Processes* 8, pp. 205-227.

- 13) Schiffrin, Deborah (1987) *Discourse Markers*. London: Cambridge University Press.
- 14) Zabrocky, Karen (1986) "The Role of Factual Coherence in Discourse Comprehension", *Discourses Processes* 9, pp. 197-220.
- 15) 上野田鶴子, 正保勇, 田中望, 菱沼透, 日向茂男(1984) 「日本語と外国語との照応現象に関する対照研究」『研究報告集 5』国立国語研究所 pp.199-282
- 16) 久野暲 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- 17) 田中望 (1981) 「コアをめぐる 諸問題」『日本語の指示詞』国立国語研究所 日本語指導参考書 8 pp. 1-50
- 18) 寺津典子 (1983) 「言語理論と認知科学」 淵一博 編著『認知科学への招待』NHKブックス 446 pp. 95-141
- 19) 中島文雄 (1987) 『日本語の構造—英語との対比—』岩波新書 373
- 20) 中村明 (1985) 「現代文の修辞」『研究資料日本文法 第十巻』明治書院pp. 1-14
- 21) 西山佑二 (1986) 「言語の構造 (一), (二)」沢田允茂編著『コミュニケーションと言語』日本放送出版協会 pp. 75-97
- 22) _____ (1986) 「言語と論理」 沢田允茂編著『コミュニケーションと言語』日本放送出版協会 pp. 98-109
- 23) 福地肇 (1985) 『談話の構造』<新英文法選書 10> 大修館書店
- 24) 古田暁 (監修) (1987) 『異文化コミュニケーション』有斐閣選書 770
- 25) 牧野成一 (1980) 『くりかえしの文法』大修館書店
- 26) 南不二男 (1987) 「談話行動論」『談話行動の諸相』国立国語研究所 pp. 5-35
- 27) 山梨正明 (1985) 「照応論」『言語生活』 406』 pp. 28-29

資 料

- 1) 朝日新聞
- 2) 井上靖『姥捨』
- 3) Picon, Keon(Tr.) *OBASUTE*
- 4) 志賀直哉『暗夜行路』
- 5) McClellan, Edwin (Tr.) *A DARK NIGHT'S PASSING*
- 6) 谷崎潤一郎『細雪』
- 7) Seidensticker, Edward (Tr.) *THE MAKIOKA SISTERS*
- 8) 松本清張『点と線』
- 9) Yamamoto Makiko & Blum, Paul (Tr.) *POINTS & LINES*
- 10) 星新一『ノックの音が』
- 11) Jones, Stanleigh (Tr.) *THERE WAS A KNOCK*

- 12) *BUSINESS VIEW* 別冊『米議員9人に問う 日米関係の危機』
- 13) Salinger, J. D. *THE CATCHER IN THE RYE*
- 14) 野崎孝 (訳) 『ライ麦畑でつかまえて』